

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：32507

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770113

研究課題名(和文)異なるものの痕跡：アメリカン・ルネッサンスにおける翻訳の文化的役割

研究課題名(英文) The Traces of the Other: The Cultural Function of Translation in the American Renaissance

研究代表者

古屋 耕平 (Furuya, Kohei)

和洋女子大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：70614882

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、南北戦争前のアメリカ文学(特に、アメリカン・ルネッサンスの文学)の形成において、当時の翻訳理論及び実践が果たした文化的役割に的を絞って行われた。アメリカ合衆国が国家としての同一性を確立してゆく過程において、政治、歴史、科学、哲学、宗教、文学の分野で、多くの作家が様々な形で翻訳作業に携わっている。しかし、従来の単一言語的なアメリカ文学研究においては翻訳の意義は看過されてきた。本研究は、近年のトランスナショナルな文学研究と翻訳研究で発展してきた批評的方法論を導入し、アメリカ文学の起源を、翻訳を通じた世界の文学や言語の流過程の中に改めて位置付けた。

研究成果の概要(英文)：The present study is focused on the cultural function of translation theories and practices in the formation of antebellum American literature, especially of the American Renaissance. As the United States gradually gained its national identity, numerous writers in the fields of politics, history, science, philosophy, religion, and literature occupied themselves in various tasks related to translation, which monolingual American literary studies have traditionally overlooked. By employing recent methods developed in transnational literary studies and translation studies, this study reconfigured the origin of American literature in the world-wide exchange of languages and literatures through translation.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学

1. 研究開始当初の背景

従来のアメリカにおける、単一言語主義的な（つまり英語中心主義的な）アメリカ文学研究においては、アメリカ文学創生期のアメリカ人作家たちが多くの外国語のテキストに影響を受けて自国の文学を作り上げたという事実は殆ど無視されてきた。本研究は、アメリカ文学の創生期における翻訳の役割を明らかにし、上に述べたようなアメリカにおけるアメリカ文学研究のあり方に異議を唱えるという目標を掲げて開始された。

2. 研究の目的

主に南北戦争前までのアメリカ文学（特に、アメリカン・ルネッサンス期の文学）の形成過程において、当時の翻訳理論及び実践が果たした役割を明らかにすることを目的とした。アメリカ合衆国が国家としての同一性を確立してゆく過程において、政治、歴史、科学、哲学、宗教、文学の分野で、多くの著作家が様々な形で翻訳作業に携わっている。本研究が特に対象とするアメリカン・ルネッサンス期の作家たちも、直接的にせよ間接的にせよ、翻訳という国家的文化事業に関わることとなった。そして、同時代の翻訳の実践と理論に対する彼らの反応は、しばしばアンビバレントで、時には矛盾を孕んだものでもあった。彼らは、一面では例外なく、外国の文学、文化、言語、歴史を「内化」してアメリカ化するために腐心したし、その一方で、意図的あるいは偶然的に、自民族中心主義やナショナリズムや帝国主義を疑問に付し、アメリカのナショナル・アイデンティティーを「外化」するような翻訳に、理論面であるいは実践面で、関わることにもなった。

現在のアメリカにおけるアメリカ文学研究者の平均的な外国語能力や知識、また外国語への関心の度合いと比較するならば、十九世紀前半までのアメリカ文学者たちは驚くほど外国語に触れていたと言えるだろう。しかしながら、二十世紀以降の単一言語的なアメリカ文学研究においては、古典アメリカ文学形成に翻訳が果たした役割については殆ど注目されてこなかった。近年のトランスナショナルな視点からのアメリカ文学史の読み替え作業は多くの成果を産んできたが、トランスナショナルな文学や文化や言語の流通を可能とする条件としての翻訳の役割に注目した研究は数少なく、エリック・シェイフィッツ、ワイチャー・ディモック、コリーン・グリーンニー・ボッグスらが行なっているのみであった。そして、特に翻訳が最も盛んであった独立から十九世紀前半にかけてのアメリカ文学における翻訳文化の影響を包括的に論じた研究は存在していなかった。

本研究は、過去 20 年ほどの翻訳理論の発展に負う所が大きい。近年の翻訳研究は、しばしば自民族中心主義的な、ナショナリスティックな、あるいは帝国主義的な政治イデオロギーのエイジェンシーとしての翻訳の機

能を明らかにした。また、より特定のフェミニスト及びポストコロニアルの観点からも、第三世界の女性文学作品の持つ文化的、言語的、修辭的特殊性の在り処である翻訳不可能なもの痕跡を抹消する、粗雑な英語翻訳に内在する植民地主義的イデオロギーについて注意を促している。

以上のような翻訳理論を参照しつつ、十九世紀アメリカにおける翻訳をめぐる複雑な諸相を、アメリカン・ルネッサンスの作家たちのテキストとそのコンテクストを精読することに寄って浮かび上がらせることが、本研究の主要な目的であった。

3. 研究の方法

本研究は、主に文献を入手して精査し、論文を執筆するという形で行われた。論文については、各テーマに分けて執筆し、分量に応じて一つの論文として国内外の学会誌に投稿し、専門家の判断を仰いだ。また、論文のアイデアについては、やはり国内外の学会において発表を行い、専門家との意見交換を行った。加えて、国外の資料館、図書館等を訪れ、国内で入手不可能な一次及び二次文献の収集に当たった。これらの活動を通じて得られた知見を改めて本研究にフィードバックさせて、各論の修正を行いながら、プロジェクト全体を発展させた。

4. 研究成果

全体としては、十九世紀半ばまでのアメリカ文学の形成に翻訳が果たした役割を明らかにするという研究開始当初の目的はほぼ達成されたと評価できる。また本研究の過程で、派生的に新たなプロジェクトのアイデアを幾つか発見することができたという意味でも、総合的な研究成果という観点からは、本研究プロジェクトは成功であったと言える。より具体的には以下のような成果を得ることができた。

平成 25 年度には、主にハーマン・メルヴィル関連のテキストについて研究を行い、十九世紀半ばからの合衆国の英語化政策とメルヴィルの後期作品における翻訳思想との関係を分析した論文「アメリカン・ルネッサンスと翻訳——メルヴィルの場合」を国内学会誌に発表した。また、翻訳理論研究の一貫として、The First International Deleuze Studies in Asia Conference において、ジル・ドゥルーズのメルヴィル論を分析する発表を行った。これらの活動を通じて、国内外のアメリカ文学研究者及び批評理論・哲学研究者からメルヴィル個別の問題、及び理論的な問題について更なる研究を進める上での、有益なコメントを得ることができた。

平成 26 年度には、主にラルフ・ウォルド・エマソン及びナサニエル・ホーソン関連のテキストについて研究を行い、エマソンの初期作品とドイツ翻訳理論との関係を分析した論文「ビルドゥングと超越——エマソンと

ドイツ翻訳理論」を発表した。また、年度中に二つの国内学会、一つの国際学会で、アメリカン・ルネッサンスにおける翻訳の問題について発表を行った。また、年度末には、本研究課題の一部をなす博士論文を完成させ、Texas A&M University に提出した。これらの活動を通じて、国内外の研究者より、アメリカン・ルネッサンス全般にわたって幅広いコメントを得ることができた。

平成 27 年度には、それまでの研究で扱わなかったマーガレット・フラー関連のテキストの研究に着手した。年度内に二つの国内学会、一つの国際学会、一つの海外大学招待講演を行い、研究経過の幅広い発信を行った。特に、慶應義塾大学で開催された国際メルヴィル学会では、国内外のメルヴィル研究者から多くの有益なコメントを得ることができ、英語論文の国際学会誌発表に向けての有益な示唆を与えることができた。また、同年度内に、本研究から派生した、エマソンとポジティブ心理学の関連についてアフェクト理論を応用して分析した論文が、論文集の一部として出版され、次のプロジェクトに向けての新たな着想を得ることができた。

平成 28 年度には、前年度末に大韓民国の Hankuk University of Foreign Studies で行った講演の原稿を元にした論文を同大学の学術誌に発表した。同年度内には、本研究と関連する、ナサニエル・ホーソン作品における歴史の概念を論じた論文が論文集の一部として出版された。また、昨年度より少しずつ進めてきたマーガレット・フラーにおける翻訳の問題についての発表を国内シンポジウムで行った。これらの活動を通じて国内外のアメリカ文学研究者から多くのコメントを得ることができた。

四年間の研究期間を通じて、国内外で 5 本の論文・図書を出版し、10 回の学会発表を行うなど、一定水準を超える研究成果を残すことができた。国際的な水準では、合衆国内の大学に博士論文を提出し授与されたことは、自身の研究成果が英語文献として世界的に参照される可能性を持ち得たという点で、一定の学術的価値を持つ。しかしながら、インパクト指数の高い国際学術誌に論文を発表することはできておらず、これについては今後取り組むべき大きな課題とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Furuya, Kohei, "Translation and Classic American Literature: A Prospect for the Future of American Literary Scholarship" *Journal of British & American Studies* 37 (2016): 85-107.

古屋耕平「ビルドゥングと超越—エマソンとドイツ翻訳理論」『和洋女子大学紀要』55 集、2015 年 3 月、頁 15-23。〔査読論文〕

古屋耕平「アメリカン・ルネッサンスと翻訳—メルヴィルの場合」『スカイ・ホーク』1 号、2013 年 12 月、頁 72-97。〔査読論文〕

〔学会発表〕(計 6 件)

Furuya, Kohei, "Translation and Nation: American Literature in the Age of World Literature." The 2016 Special Lecture series, the Graduate Program in English, Hankuk University of Foreign Studies. March 11, 2016. Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea.

Furuya, Kohei, "Moby-Dick and the Ethics of Translation." The 2015 International Herman Melville Society Conference. June 26, 2015. Keio University, Japan.

Furuya, Kohei. "Translating Children's Words: Hawthorne, Melville, and the Question of Language Education." The 2014 Nathaniel Hawthorne Society Meeting. June 13, 2014. North Adams, MA. USA.

古屋耕平「翻訳不可能性について—メルヴィルの自然、風景、いきもの」日本ナサニエル・ホーソン協会、第 33 回全国大会シンポジウム「旅する 19 世紀アメリカ作家たち—自然、風景、いきもの」、2014 年 5 月 23 日、かでの 2・7 北海道立道民活動センター。

古屋耕平「アメリカン・ルネッサンスと翻訳コミュニティの形成」日本アメリカ文学会、中部支部第 31 回支部大会シンポジウム「知のコミュニティの形成—アメリカン・ルネッサンスを中心に」、2014 年 4 月 20 日、中京大学。

Furuya, Kohei. "Becoming-Foreigner: Melville, Deleuze, and the Stuttering of American Literature." The First International Deleuze Studies in Asia Conference. June 1, 2013. Tamsui, Taiwan.

〔図書〕(計 2 件)

古屋耕平「『頭を突き出した蛇のような疑念』—「セプティミアス・フェルトン」における歴史と情動」『ホーソンの文学的遺産—ロマンスと歴史の変貌』高尾直知、西谷拓哉、成田雅彦編、開文社、2016 年 5 月、頁 421-43。

古屋耕平「エマソンの幸福薬—自然と偶然について」『身体と情動—アフェクトで読むアメリカン・ルネッサンス』高橋勤、竹内勝徳編。彩流社、2016 年 3 月、頁 79-100。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

古屋 耕平 (FURUYA, Kohei)
和洋女子大学・人文社会科学系・准教授
研究者番号：70614882

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()